

オープンサイエンスにおけるデータの共有と「民主化」の理念

長門 裕介 (Yusuke Nagato)

大阪大学 社会技術共創研究センター

現代のオープンサイエンス（以下、OS）をめぐる議論のなかでは「民主（democratization）」はひとつの重要な概念であると見なされている。文献によって強調点はさまざまだが、科学的探究についての協同主義、公益主義、可謬主義、多様性の重視といったさまざまな要素がこの「民主化」といった用語に託されていることが見て取れる。

一方、現代のOSの方法に関する議論ではデータの共有が強く意識されている。これはデータを特定の研究者や研究機関が占有し、論文化に応じて必要なだけ開示するという手法ではなく、研究で使用したデータ、コード、その他のリソースを誰でも見れるようにすることがOSの理念に沿うものである、という発想に基づいている。

OSにおける民主化の理念ないし目的とデータの共有という手段の関係はいっけんしたところ明らかであり、問題の余地のないものに思われるかもしれない。しかし、近年の論者はこうした関係に一定の留保を置いている。たとえばサミュエル・ムーアは、データの共有は効率性や再現可能性といった関心にもとづいて受容されており、民主化との関係は自明なものではないとする (Moore 2022)。サビーナ・レオネッリはさらに進んで、データの共有という視点はデータの所有という観念を基礎にして成立しているものであって、OSはそうした枠組みを超えて、包摂性やコミュニケーション、自己変容などを備えることを訴えるものであるとする (Leonelli 2023)。

私の発表は「データの共有」に関するこうした近年の議論を紹介し、OSにおける「民主化」の意味が幾分文脈依存的なものであること、データの共有によって達成される価値と達成されない価値の区分について明らかにしようとするものである。

【参考文献】

Leonelli S. (2023). *Philosophy of Open Science*. Cambridge University Press, [h
https://doi.org/10.1017/9781009416368](https://doi.org/10.1017/9781009416368)

Moore, S. (2022). How does open science ‘democratise’ and ‘collectivise’ research?, <https://www.samuelmoore.org/2022/06/05/howdoes-open-science-democratise-and-collectivise-research/>